



北上の美術 覚え書き

ここまで、岩手の美術の流れを大まかに見てきましたが、今号以降では、北上の美術の流れについて、次にあげる視点から見ていきたいと思います。一つは、及川香石と及川文吾の萩の江美術協会のこと。次に外来画家の活躍と画廊の誕生、そして地元画家の美術団体とその展覧会の流れ。群れずに孤高の精神で制作に励んでいる画家たち、北上から他所に出て活躍した画家たち、心ある画家の絵画教室の設立、などです。及川香石については、平成18年に北上の先人画家展第1号として、当美術館で及川香石展が開催され、及川香石の孫の及川放射線内科医院、及川優院長が祖父の画集を3集も刊行しましたので、市民の関心は高まっています。



天駆ける 利根山光人

明治21年生まれの及川香石は画人として生きることを夢見て東京、谷口香岩、藤島静村、荒井寛方等に師事して日本画の基本を学びます。その間、美人画で有名な伊東深水とも交友があります。その後、家の都合もあり郷里北上に帰り制作活動を続けます。制作のため広く各地を巡り歩き、お寺や民家に多くの作品を残しています。また多くの後進の指導にもあたり、宮沢賢治と交流があったこともわかっています。

及川文吾は明治28年北上に生まれました。及川香石の親戚にあたります。大正9年東京美術学校（現東京藝術大学）西洋画科を卒業、帝展（現日展）に入選を続け、白日会展にて白日賞受賞、無鑑査となります。東京で教師をしながら制作をしていましたが、戦後北上に疎開、北上の高校で美術教師として後進の指導にあたりました。北上では最初の美術団体と思われる萩の江美術協会を設立、主宰。阿部圓治郎、藤原八弥、堀込幸坊、小池文藏らと共に北上の美術を盛り上げました。カギヤデパート等で定期的に展覧会を開催し、これを見て絵を描き始めた人も多く、私もその一人です。及川文吾は昭和41年頃に再度上京しますが、北上を出る前に黒沢尻西小学校で催された大個展は大変素晴らしいものでした。作品は今も萬鉄五郎美術館等に所蔵されており、北上の誇りとなっています。

北上に移住してきた画家の第1号は藤原八弥だろうと思います。彼は大正3年、萬鉄五郎と同じく岩手県東和町に生まれ育ち、昭和8年、萬鉄五郎に感化されて東京川端画学校で洋画を学びます。独学で小学校教師検定試験に合格、北上で結婚し公立学校教員として35年間勤めます。昭和10年頃から北上地方の歴史、伝統文化、民俗芸能、史蹟名勝をモチーフにして絵画制作を続け、大潮展、水彩画連盟展、一水会展等の美術展に出品。昭和45年、展勝地に藤原八弥美術館を建設、絵画教室を開き、教え子を中心に美術会を設立。今も都鳥源司や川杉雅江などが跡を継いで多くの会員達と活躍しています。

その後、北上に現れた画家は湯田町生まれの川村勇です。戦後、北上の先進的な文化人、田島屋薬局の小田島専司や高与家具店の高橋喜太郎などが画家のパトロンの役割を果たしていたため、画家たちが方々から慕って来て、その一人が川村勇です。川村勇は昭和2年に湯田町に生まれ、22歳の時に画家を志して上京。上野の美術学校近くの公園内にテントを張って絵の独学を始めます。後に放浪の画家と言われる始まります。幾多の辛酸を舐めながら昭和26年頃に一線美術展入選、翌年に同展の奨励賞を受賞、会員に推挙されます。その後は旺玄会展、国画会展に出品を続け、昭和33年に最初の個展を東京日比谷公園画廊で開催、翌年香港大学の招きで香港に渡り、香港のデパートで大々的な個展を開催。香港での体験は異国への関心を高め、毎年のように海外に出かけるようになり、イタリア、オーストリア、ポルトガルと放浪の末にたどり着いたのがインドだったようです。原色を配した独特の画風を作り上げ、田島屋画廊、高与画廊で個展をやったものです。後年、彼は郷里湯田町に自分の美術館、デッサン館を建設、湯田町に寄贈しております。

異色美術館訪問記

山形県 真下慶治記念美術館

1970年代、新象作家協会展に作品を出品していた頃、毎年6月には画友池田次男らと共に東京に出て都内の画廊巡りをしたものだ。ある時、銀座の日動画廊のショーウィンドーの前で釘づけになった。飾られていた作品を見て一同言葉も出ない程の衝撃を受け、疲れも吹き飛び作品に見入った。飾られていた作品は山形の最上川風景を描いたもので、作者は真下慶治という画家だった。中に入ってみると、ほとんどが最上川風景を描いた作品で、その素晴らしさに圧倒されてしまった。それ以来、真下慶治という画家は忘れられない画家の一人となった。

その頃から私も池田次男も抽象系の新象作家協会展への出品をやめ、具象画を描くようになった。それ程私達に影響を与えた画家だった。

平成8年、山形の天童市立美術館で「小松均、真下慶治が描くふるさとの大河母なる最上川展」が大々的に開催された。二人の遺作展という形の展覧会だった。この大展覧会で受けた感動も、日動画廊での時と同じだった。若い時からの代表作が並べられ、最上川の四季、特に冬の最上川風景は圧巻だった。



大淀の眺め 真下慶治

その後、真下慶治の記念美術館ができないものかと心待ちにしていたところ、平成16年に、彼の生地である山形県村山市に真下慶治記念美術館ができたことを知った。そして平成19年、念願の真下慶治記念美術館を訪問することができた。ちょうど開館3周年記念特別展「真下慶治と日展作家30人展」が開催中で、観客も多く盛会だった。

美術館は一階建てで真下慶治常設展示室、企画展示室、森林学習室、事務所などが並び、テラスからは真下慶治が描いた最上川の流れが眺望でき彼の世界に浸ることができる。

真下慶治は大正3年(1914)山形県最上郡戸沢村に生まれる。父は医師、4人兄弟の二男で、山形県新庄北高校を卒業して上京、文化学院美術部で石井白亭、有島生馬に学ぶ。両人は真下慶治の生涯の師となっている。2人の師が一水会創設に加わると真下慶治も一水会展に出品するようになる。また、一水会員が多く出品していた官展の文展、帝展、戦後の日展にも出品した。

画業60年と言われる真下慶治は昭和15年に紀元2600年奉祝展に入選、作品がイタリア政府買い上げとなる。昭

和21年、第1回、第2回日展特選、文部省買い上げ、昭和33年、第4回斎藤茂吉文化賞受賞。昭和43年から、美術評論家今泉篤男の推薦で山形大学の講師、助教授、教授と進んで58歳の時に画業に専念するため辞任。昭和55年日展審査員、昭和61年日展評議員となる。平成4年に小山敬三美術賞受賞、その翌年に白血病のため逝去、79歳だった。

60年と言われる画業の中で、もちろん最上川だけを描いたわけではなく、静物画や人物画も描いているが、22歳で東京を引き上げて1、2年した時に師の石井白亭に、「君は雪国にいるのだから雪景を描いたらどうか」と言われ、以後は最上川の雪景を描くようになったと言われている。

もう一つ特筆したいのは、同じ最上川流域に在住していた歌人斎藤茂吉との関係である。若い時から文学少年であった真下慶治は、昭和24年に刊行された斎藤茂吉の「白き山」を入手、大きな衝撃を受けたと言われている。真下慶治の雪景に斎藤茂吉と同質の詩情が感じられるのは当然のことにように思われる。交友があったかはわからないが、斎藤茂吉の日記の中には真下慶治の名前が出ているとのことである。昭和33年に斎藤茂吉文化賞を受賞した真下慶治はどんなに喜んだことか。そのことが制作上の大きな励みとなったことは間違いのないと思われる。

利根山光人記念美術館専任研究員 高橋 大八

利根山光人記念美術館 平成25年度企画展

鬼柳洋一展

慈悲の心と郷土愛で描いた画家

- ・会期 6月1日(土)～8月29日(木)まで
- ・会場 利根山光人記念美術館
- ・開館時間 午前10時～午後4時
(入館は閉館30分前まで)
- ・常設展示「東北の祭り」シリーズも同時展示中



鷹 (部分)

発行 北上市まちづくり部生涯学習文化課
〒024-0061 岩手県北上市大通り1-3-1
Tel 0197-72-8304 Fax 0197-63-3121